

山大病院だより

1 2017
月号
vol.232



特集 小児診療の要として



左から田口病院長、猪上看護部長、谷澤医学部長

新年を迎えて

山口大学医学部附属病院 病院長 田口 敏彦

みなさん、あけましておめでとうございませう。

心機一転、決意も新たに今年も頑張ろうと思っておられるところではないでしょうか。

一昨年から始まった新病棟の建設も地盤の整備や地下部の主骨格が完成しつつあります。平成30年の完成を目指して、着々と計画は進んでいます。また長年の懸案事項でありました、たんぼ保育園の定員拡充、改修については、昨年10月に建物が新築され再出発をしました。定員は90名になり、保育内容についても、病児保育と夜間保育が開始され、今後さらに機能を充実させていきます。まだまだ働きやすい環境づくりのためにはやるべきことがあります。また、病院再整備と並行しながらも二つ実現させていかなければならないと思っています。

附属病院は、「働きやすい」病院であると同時に「働きがいのある」病院づくりを目指しています。「全ての価値基準を患者さんのために」という想いを全員で共有し、患者さんに感謝してもらえ、病院となるよう努めていきます。

附属病院の理念として(1)全人的医療、(2)医療人の育成、(3)先進的医療の推進、(4)地域医療の発展、の4つがあります。2年前の再整備では、まず「どんな病院を建てるか」という基本的な考え方について、若手から教授まで、あらゆる層を代表する医師や職員と協議を重ねました。その中で、本院の目指すべき将来像として「Your Health, Our Wish」(あなたのために)というスローガンが誕生しました。まさに「働きがいのある」病院づくりにはこのスローガンがぴったりだと思います。

このスローガンのもとに、職員のみなさんには大きな夢をもつてこの1年仕事に取り組んでいただくことをお願いいたします。私の新年の挨拶に代えさせていただきます。

みなさん、心をついてがんばっていきましょう。

小児診療の要として

小児科 講師 松重 武志



2



3



1



5



4

1 予防接種 2 外来待合室 3 プレイルーム 4 NICU 5 カンファレンス

小児科は、子どものあらゆる病気や成長発達に関わる診療の中心的役割を担う部門です。様々な疾患に対して専門診療や他科診療が必要となるときも、交点として機能します。

本院の小児科の特徴の一つとして、総合的かつ専門領域までバランス良くカバーできることが挙げられます。県内全域から重症疾患、難治性疾患を持ったお子さんの紹介を受けています。一人の患児が複数の病気を抱えていることもあり、それぞれの治療が互いに影響を及ぼし合ったり、別の大本となる疾患が新たにみつかったりすることもあります。小児科内の専門グループ間あるいは関係各科と連携を密にしながらか、同じ施設の中で診療を完結できることも利点です。最終的にお子さんが大人になるまで、心身ともに健やかに育んでいくことが目標です。

小児科には25名の小児科医(うち小児科専門医22名)および臨床心理士1名の診療スタッフが在籍しています。診療グループには、感染・免疫・アレルギーグループ(原発性免疫不全症、小児リウマチ性疾患、食物アレルギー等)、血液・腫瘍グループ(白血病、小児がん等)、神経グループ(急性脳症、てんかん、発達障害等)、腎臓・消化器グループ(ネフローゼ症候群、炎症性腸疾患等)、循環器グループ(先天性心疾

患、川崎病等)、内分泌・代謝グループ(低身長、糖尿病、先天性代謝疾患等)、新生児グループ(低出生体重児・早産児、新生児仮死等)があり、それぞれの専門領域疾患について外来・入院診療を行っています。

外来は、ひと月に初診1200~1500人(うち紹介50~90人)、再診1000~1600人が来院され、年間総受診者数にすると15,000~20,000人に上ります。授乳中のお母さんも多く、小児科外来の隣に授乳室を設置しています。外来待合室では、待ち時間の間にお子さんが退屈しないように、ジブリやディズニーなどのDVDを流しています。感染症のお子さんが多い一方で、基礎疾患のため感染症に弱いお子さんも多く受診されるため、感染隔離室を2つ設けています。検査では非侵襲的な超音波検査を多く用いていることは、他県と比較した特徴の一つです。

1病棟5階の小児科病棟は、看護師29名、保育士2名が勤務しており、病床数40床(うち個室4床)に対して年間1,300~1,500人(月100~120人)の入院があります。長期入院が必要なお子さんも多いですが、入院中もお子さんは日々成長していきます。成長発達にとって遊びや学習も重要な要素です。プレイルームで保育士や子ども同士の関わり、七夕やクリスマス会などの行事を行う

子どものリウマチをご存知ですか？

●山口県の現状

私は鹿児島大学病院において、2,000名を超える小児リウマチ性疾患の患者さんを診療しました。この数は、現段階の本院では経験できないほどの多さです。鹿児島県と山口県には人口差がありませんが、小児リウマチ性疾患の患者さんの数に大きな差があります。もしかしたら山口県では、他科の先生方に診ていただいている、診断がつかずに辛い思いをされている、または、どこの病院へ行けば良いのかわからずに困られている患者さんが多くいるのかもしれない。

●小児期3大リウマチ性疾患

そもそも、リウマチとはどういう意味なのでしょう。リウマチとは、ギリシャ語で「流れ」を意味します。リウマチ性疾患の語源は、痛みが体中を流れる病気に由来し、骨、関節または筋肉の炎症を伴う病気の総称です。成人期のリウマチ性疾患において最も多いのは関節リウマチで、関節の炎症を起こす病気です。

小児期の3大リウマチ性疾患は、若年性^{※1}特発性^{※2}関節炎、若年性全身性(ループス)エリテマトーデス及び若年性皮膚筋炎です。

①若年性特発性関節炎

持続する関節の炎症により、関節が壊れて動きが制限される病気です。全身型という発熱が主体のものと、関節型という関節炎が主体のものがあります。全部で7つに分類され、このうち、関節リウマチと同様の病気と考えられているのが、リウマトイド因子陽性の多関節炎です。残り6つは、関節リウマチとは異なる病気で、ぶどう膜炎という目の病気を合併することもあります。関節炎は、関節が腫れて痛くなることが特徴で、1か所のこともあれば多数の関節のこともあります。治療をしなければ関節が壊れて元に戻らないこともあるため、早期診断が大切です。

②若年性全身性(ループス)エリテマトーデス

ループスとはラテン語で「狼」、エリテマトーデスとはギリシャ語で「赤」を意味します。これは症状の1つである蝶々と似た形の特徴的な顔の赤い皮疹が、狼の顔の模様と似ていることを表しています。全身の臓器に多彩な症状が起こる病気で、特に、ループス腎炎という蛋白尿や血尿を認める腎臓

の病気を高率に合併します。一方、尿検査で異常がないにも関わらず腎臓の炎症が進行する患者さん(サイレントループス腎炎)もいますので、診断には腎臓の組織をみる(腎生検)が必要です。成人との違いとして、小児の方がより病勢が強く重症度が高いため、積極的な治療が必要です。

若年性全身性(ループス)エリテマトーデスは、いわゆる遺伝病ではありませんが、家族内で発症する可能性があります。例えば、一卵性双生児において、1人が若年性全身性(ループス)エリテマトーデスと診断される場合、もう1人が発症する確率は約50%といわれています。

③若年性皮膚筋炎

病名の通り、皮膚と筋肉に炎症を起こす病気です。特徴的な皮膚症状としては、まぶたが腫れて紫紅色になるヘリオトロープ疹、手の甲の関節に皮疹ができるゴットロン徴候があります。筋症状としては、筋力低下により、だっこをよくせがむ、よく転ぶ、階段を上れなくなるなどがあります。一方、筋症状が目立たない患者さんは間質性肺炎を合併しやすいことがわかっており、注意が必要です。成人との違いとして、小児では皮膚の下に大小の塊(皮下石灰化)ができたり、皮膚潰瘍を起こす頻度の高いことが特徴です。

小児リウマチ性疾患は、原因不明の発熱に対する検査により診断がつくこともあります。最も怖い合併症はマクロファージ活性化症候群(マクロファージという細胞が血球を食べてしまう病気)で、発症24時間以内に重症化することもあるため、早期診断及び治療が重要です。

子どもの総合医として、県内の子どもたちおよび家族の笑顔と未来を支える助けになれば幸いです。今後ともご支援のほど、宜しくお願い致します。

10人となつていきます。ドクターヘリで県内全域から重症児が速やかに搬送され、最先端の集中治療を行うことができる体制を整えています。

1病棟4階には総合周産期母子医療センターがあり、集中治療が必要な新生児を対象としたNICU(12床)とGCU(8床)の計20床があります。年間400〜450人(月30〜40人)の入院があり、うち低出生体重児が約100人、極低出生体重児が約20人、超低出生体重児が約

場を提供しています。また、小学生以上のお子さんを対象に、新川小学校と神原中学校の院内学級が設置されており、症状等に応じて学習を行うことができます。

山口大学大学院
医学系研究科
医学専攻
小児科学講座
助教 医学博士



脇口宏之

■自己紹介

専門は、アレルギー、免疫学及びリウマチ学です。私は、山口県において小児リウマチ性疾患に罹患した患者さんに適切な診断及び治療を提供するために、西日本最大の専門施設である鹿児島大学病院に国内留学し、この分野の第一人者である武井修治教授にご指導いただき、日本小児リウマチ学会が定める小児リウマチ専門医研修を修了しました。現在は、厚生労働省小児リウマチ性疾患研究班及び小児リウマチ国際研究機関(PRINTO)の研究者も務めております。

本院においては、小児リウマチ性疾患の患者さんを対象に外来(月曜日午前、水曜日午後)及び入院を担当しております。

●さいごに

小児と成人のリウマチ性疾患は、病態及び治療が異なります。“決して小児リウマチ性疾患は成人疾患の小型化ではありません。”よって、小児リウマチ^{※3}が中心となり、他科の先生方と連携をとりながら診療することが必要となります。

関節の痛みが良くならない、顔や手の甲の皮疹が目立ってきた、原因不明の発熱が1週間以上続くなど、リウマチ性疾患が疑われるお子さんがいましたら、遠慮なくご相談ください。1人でも多くの患者さんを救いたいと考えております。

※1 / 若年性：16歳未満に発症すること

※2 / 特発性：原因不明のこと

※3 / 小児リウマチ医：リウマチ性疾患の診療を専門にしている小児科医



就任のごあいさつ

この度、平成28年11月1日付で、眼科学講座教授を拝命いたしました。木村和博(きむらかずひろ)と申します。「山大病院だより」をご覧になられている皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は、平成7年に山口大学医学部を卒業後、大阪大学大学院医学研究科の博士課程に進みました。平成11年に大阪大学で学位を取得、その後京都大学大学院医学研究科に移り研究を行って参りました。これまでの研究生活で、生化学、分子生物

学的な研究思考並びに創業の基礎を学ぶことが出来ました。平成15年に山口大学医学部眼科学教室に帰局した後、網膜硝子体疾患を専門とし、診療、教育、研究に携わってまいりました。

人は、外部からの情報入力力の80%以上を眼に依存すると言われます。糖尿病網膜症、緑内障、加齢黄斑変性など多くの疾患が原因で失明の危険にさらされます。

私たちは、前眼部から後眼部にわたるすべての眼疾患に幅広く対応できる体制を整えており、的確な診断のもと治療法を選択し、手術では白内障手術、角膜移植、緑内障手術や網膜硝子体手術など最先端の多彩な手術療法を行っております。

視覚は失つてその大切さが判るといいます。人生を明るく充実したものにするためにも、私たちは眼科専門の医療施設として患者さんの苦しみを理解し、目の健康を守り、最先端かつ最良の医療を提供できるように努めて参ります。

今後も幅広く眼疾患に対応できる眼科医を多く育成し、眼科医療の向上に努め、山口大学発の新規治療法の確立を目標に大学病院に貢献してまいります。皆様、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



山口大学大学院医学系研究科
眼科学講座 教授

木村和博

平成28年10月1日付で、環境保健医学講座教授を拝命致しました浅井義之と申します。着任に当たり皆様にご挨拶申し上げます。

私は昭和50年に奈良県に生まれまし た。平成6年、大阪教育大学教育学部附 属高等学校天王寺校舎を卒業し、大阪大 学基礎工学部生物工学科に入学しまし た。生理機能のダイナミクスを数理学の 観点から解析する学問を学び、平成15年 に博士(工学)を取得しました。その後、 イタリア、スイス、フランスに遊学し、神経 活動やその情報処理に関する計算論的 研究と、脳外科の手術支援を目指した計 測処理システムの開発に従事しました。こ れらの経験から数理情報工学的アプロー チを医学生理学に役立てる重要性和可 能性を強く認識し、平成17年、帰国し産 業技術総合研究所人間福祉工医学研究 部門において中心動脈硬化度を簡易に評

価する手法の考案などをしました。

ちょうどその頃世界を見渡すと、多階 層的な生理機能を網羅的に扱おうとい う研究分野であるフイジオームや、システ ム論的立場から生理現象を理解しよう とするシステムバイオロジーが流行してき ていました。平成19年、折しもそのような 大きなうねりの中で私自身その新しい分 野に興味をひかれていた頃、大阪大学臨 床工学融合研究教育センターの特任准 教授を拝命し、それ以来、平成22年に沖 縄科学技術研究基盤整備機構(現:沖縄 科学技術大学院大学)に赴任後も、我々 が培った多階層生理機能モデリング・シミュ レーションの技術を活かしながら、多くの 先生方のご協力のもとシステムバイオロジ ー研究を推進して参りました。

人工知能技術が急速に発展してきてい る今日、この方面からの研究が貢献でき る可能性がますます拡大してきていると 感じられます。今後は山口大学医学部附 属病院の先生方としっかりと連携させて いただき、システムバイオロジーという観点 から教育・研究を推進することで、山口大 学や医学の発展に貢献するとともに、情 報工学の立場から患者さんのお役に立て ることを目標にしています。皆様、今後と もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



山口大学大学院医学系研究科
環境保健医学講座 教授

浅井義之



建築概要説明



免震装置



再開発整備事業へのアクセス

山口大学 再開発

検索



再開発整備事業URL

<http://h-seibi.hosp.yamaguchi-u.ac.jp>

11月25日(金)、新病棟建設現場の見学会が開催され、山口県及び宇部市近郊の行政機関の技術系職員や、大学等で建築を学ぶ学生さんなど、学内外合わせて約140名の参加がありました。

今回の現場見学会は「建築概要説明」と「現場見学」の2部構成で行われました。まず「建築概要説明」では、本学の吉岡理事から挨拶が述べられた後、施設環境部長及び設計事務所の担当者から、建築意匠や構造計画など、建築に関する専門的な建物説明がありました。

「現場見学」では、清水建設株式会社や大学担当者の現地説明のもと、建物の基礎部分に設置される免震装置を中心に興味深く新病棟建設現場を見学しました。この建物は免震構造と呼ばれ、地震による横ゆれを吸収し、震度6でも建物が破損せずそのまま医療事業を継続出来るよう設計されています。写真に写る黒いゴムで出来た免震装置など、いろいろな種類の装置が建物の地下に設置され、まさに縁の下の力持ちとなって新病棟を支えます。



ホットなニュースをご紹介します

山/大/病/院 NEWS

Part 1

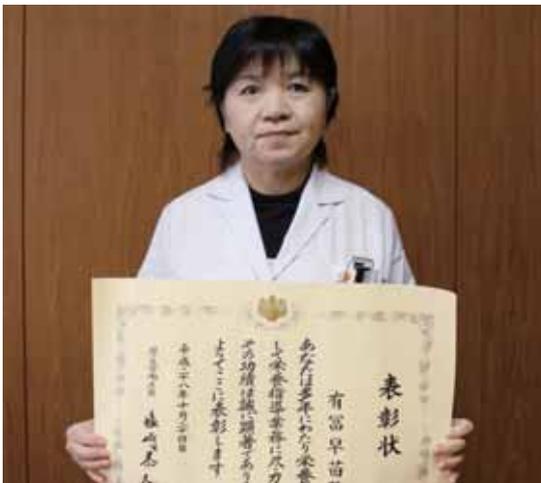
NEWS

栄養治療部有富副部長が厚生労働大臣表彰受賞

栄養治療部の有富副部長が、平成28年度栄養関係功労者(栄養指導業務功労者)厚生労働大臣表彰を受賞しました。

本賞は、長年にわたり栄養改善の推進に従事した功績をたたえられ贈られるものです。

有富副部長は、「この度の受賞にあたり、みなさまに心より感謝を申し上げます」と受賞の喜びを語りました。



病棟リレー

各病棟を紹介します！

1 病棟 6 階西

1 病棟 6 階西は、53 床の第 2 外科の病棟（共通病床 4 床含む）であり、34 名の看護師で担当しています（H29 年 1 月現在）。第 2 外科は消化管疾患、胆・肝・膵疾患、

乳腺・内分泌疾患で、手術を受ける患者さんをはじめ、化学療法やワクチン療法を受ける患者さんの看護を担っています。手術件数は年間 650 例以上あり、最近では、手術の技術も進歩し、高齢の方の手術も多くあります。私たちは、患者さん

ができるだけ日常生活が行える状態で、1 日も早く退院できるよう、手術翌日からしっかりと寄り添いながら歩行を援助し、早期離床に積極的に取り組んでいます。早い時期から歩くことで、呼吸や消化管の機能の回復を高めることができるため、日々、激励しながら支えています。

他部署の仲間とも連携しています!!

ストーマ（人工肛門）手術の場合には、患者さんの早期社会復帰を目指して、患者指導や生活援助を行っています。術後のケアの質がその後の生活の質に影響します。外來の WOC ナース（皮膚・排泄ケア認定看護師）とも連携しながら、患者さんが交換手技を獲得して帰れるように、最適なケアができる装置の選択や交換方法を指導しています。



スタッフのチームワークは抜群!

しっかりと寄り添いながら歩行を援助し、早期離床に取り組みます。

カンファレンス



また、乳房手術の場合には、病棟に配属されている乳がん看護認定看護師を中心に、術後のリハビリの指導や不安の軽減ができるよう寄り添った看護を提供しています。

食道手術の場合には、手術後の嚥下や機能回復がスムーズに行くよう、術前からリハビリテーション部の理学療法士や言語療法士と連携しています。

第 2 外科は、いつもバタバタと忙しい職場のイメージがありますが、受け持ち看護師を中心に、他部署の仲間とも連携しながら、安全で安心できる看護ができるよう日々取り組んでいます。これからも、スタッフや医師とのチームワークを大切にしながら、患者さんだけでなくご家族へもしっかりと関わるあたったかい看護を目指していきたいと思えます。



山下師長より一言

スタッフ間のコミュニケーションもよく、ハードな毎日の中、互いに協力し、あたったかい看護を提供しています。明るく、活気のある、一人ひとりが成長できる職場です。

栄養治療部
季節のレシピ
recipe

カンタンおやつでティーブレイク

お正月も終わり、そろそろおもちにも飽きている頃でしょうか？
朝食に利用されることが多くなったシリアル。このシリアルを利用したおやつを紹介します。簡単なので、子供たちもお手伝いできます。

Today's menu

シリアルボール

材料 20g/個, 8個分

- コーンフレーク(甘さ控えめ)..... 100g
- バター..... 15g
- マシュマロ..... 50g

栄養成分 エネルギー(1個当たり) 80kcal

作り方

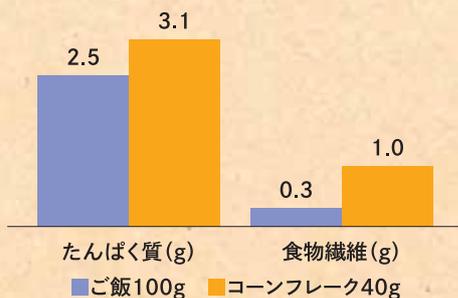
- ① フライパンにバターを入れて溶かし、マシュマロを入れて、かき混ぜながら溶かす。
- ② ①にコーンフレークを入れ、手早くさっくり混ぜる。
- ③ 8等分し、ラップに包んで丸めて、冷やしてできあがり。
コーンフレークを混ぜてからは、スピード勝負です！素早くしないと、丸める前に固まってしまう。ラップに包んで丸めるときは、熱いので要注意！



砕いたナッツ、ドライフルーツを混ぜて、棒状にしてみました。



朝食として最近注目の「コーンフレーク(シリアル)」



「シリアル」はコーン・小麦・オーツ麦・米(玄米)といった穀類を焼き上げて加工したもの。これらは、炭水化物、たんぱく質、ビタミンB1、食物繊維などの栄養がとれます。牛乳やヨーグルトと一緒に摂ると、さらにカルシウムの補給もできます。

注意すべきは、ご飯100gとコーンフレーク40gがほぼ同じエネルギーであること。またシリアルに牛乳をかけただけの食事では栄養が偏ってしまうので、野菜をプラスしたりして、食欲がないとき等に利用するのがおすすめです。

砂糖やはちみつ、チョコレートなどで、甘みがついていたり、ドライフルーツが混ざったものは、エネルギー・糖質がさらに増すため、食べすぎには注意しましょう。

◎出典：ケロッグ HP・食の医学館より

◎監修：管理栄養士 有富早苗 福田有子

NEWS

小児科病棟にクリスマスプレゼント



12月20日(火)、宇部かたばみライオンズクラブから、小児科病棟に入院中の子どもたちへクリスマスプレゼントが贈られ、感謝状の贈呈式を行いました。



式では、同クラブ青谷和彦会長から田口病院長にクリスマスケーキをかたどったタオルのプレゼントが手渡され、田口病院長からは感謝状が贈られ、ご厚意に対する感謝の意が述べられました。

その後、サンタクロースに扮した青谷会長が各病室を訪れ、入院中の子どもたちにプレゼントを手渡していきました。プレゼントを受け取った子どもたちは笑みを浮かべ、とても喜んでいました。

NEWS

「クリスマスの夕べ」で心安らぐ



12月22日(木)、外来棟1階ロビーにおいて、恒例の「クリスマスの夕べ」を開催しました。

開演に先立ち、外来棟ロビーに集まっていた入院患者さんへ、サンタに扮した田口病院長及び検査部、放射線部、薬剤部のメディカルスタッフから、クリスマスプレゼントが配られました。

山口大学のマスコットキャラクターである「ヤمامィ」も駆けつけプレ

NEWS

**「日本フィルハーモニー交響楽団
弦楽四重奏コンサート」を開催**



10月15日(土)、外来診療棟1階ロビーにおいて、入院患者さん等へのサービスの一環として「日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーによる弦楽四重奏 宇部興産グループ ふれあいコンサート」を開催しました。

これは、翌日16日(日)の「第9回宇部興産グループチャリティーコンサート(日本フィルハーモニー交響楽団 宇部公演)」開催に合わせて、宇部興産及び交響楽団のご厚意により、4人の弦楽器奏者(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)に、弦楽四重奏を演奏していただいたものです。

コンサートは、田口病院長の挨拶により開演し、地元出身でヴァイオリンの石井啓一郎さん、松本克巳さん、ヴィオラの小中澤基道さん、チェロの伊堂寺聡さんが、モーツァルトの「ディベルティメントNo1(全楽章)」、ハイドンの「皇帝より 第二楽章」やドボルザークの「アメリカより 第一楽章」など7曲を演奏されました。最後の「ふるさと」では、演奏に合わせてみんなで合唱しました。

入院患者さん、近隣住民の方など約150人の観客は、間近でのピアノの演奏による弦楽器の美しい音色に触れ、時間が経つのも忘れ、聴き入っていました。

ゼント配布を手伝い、プレゼントを手渡された患者さんからは大変喜ばれ、握手などを求められていました。

「クリスマスの夕べ」は、田口病院長の挨拶で開演し、オープニングでは、院内保育所「たんぼ保育園」の園児による「おもちゃのチャチャチャ」の合奏や「ジュウオウジャー」などの音楽に合わせた遊戯が行われ、園児たちの一生懸命な姿に温かい拍手が送られました。



続いて、山口大学医学部管弦楽団による弦楽四重奏が行われ、「ジグメルベル〜サンタが街にやってくる」や「坂本九メドレー」などの楽曲が演奏されました。集まった200人程の入院患者さん達はとても楽しい時間を過ごしました。



編集後記

新年明けましておめでとうございます。皆様、どんな新年を迎えられましたか?筆者は、年越しそばに始まり、おせち・お雑煮とあれこれ食べ過ぎてしまいました(笑)。2017年も、皆様に色々な情報をお届けできるよう頑張りますので、よろしくお願いたします。

皆さんからのご意見・ご感想をお待ちしております。今後読んでみたいテーマ、興味のある記事などお気軽にお寄せください。

FAX 0836-22-2113 E-mail me202@yamaguchi-u.ac.jp

企画発行：山大病院だより編集委員会
事務担当：山口大学医学部総務課総務係

〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号

TEL 0836-22-2007 URL <http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp>